

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 3 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320097

研究課題名(和文) 言語教育へのビューイング教育の導入 日本語教育、国語教育、英語教育の連携

研究課題名(英文) Introduction of 'Viewing' to Language Education-Cooperation between Japanese as a Second Language, Japanese Language Education, and English Education-

研究代表者

岡本 能里子 (Okamoto, Noriko)

東京国際大学・国際関係学部・教授

研究者番号：20275811

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円

研究成果の概要(和文)：メディアリテラシー研究をリードしてきたオーストラリア、イギリス、カナダの言語教育現場を訪問し、「読む、書く、聴く、話す」に加え「見る=ビューイング」を導入した教育実践を見学、調査し、教育研究者と意見交換を行なった。これら訪問で構築したネットワークや知見をもとに研究論文を公刊し、研究発表を行うとともに、当該分野の第一人者であるオーストラリアのUnsworth教授の招待講演会と日体大におけるシンポジウムを開催し、日本言語政策学会研究大会において毎年「メディアと言語政策」分科会を行う等の活動によって、デジタル化および多言語多文化化する日本社会の言語教育に「ビューイング」を導入する必要性を発信した。

研究成果の概要(英文)：We visited the leading countries of media literacy, Australia, UK, and Canada, where we observed and researched the 'viewing' education in the English classes which took the lead in valuing 'viewing' as important as the conventional four skills, reading, writing, listening, and speaking. We exchanged views with the educators and researchers after the observation. Based upon these exchanges and human-networks, we published the articles and made the presentations at the academic meetings, and coordinated the lecture meeting at Kyoto University and the symposium at Nippon College of Physical Education, both of where Professor Unsworth, Australian authority of viewing education, was invited as the lecturer.

We also promoted the sessions of 'Media and Language Education' at the annual conference of Japan Association for Language Policy every year in these three years. We have emphasized the necessity of introducing the 'viewing' into the language education in Japan through these activities.

研究分野：社会言語学 日本語教育学 国際理解教育

キーワード：ビューイング 日本語教育 英語教育 国語教育 マルチリテラシーズ メディアリテラシー

1. 研究開始当初の背景

近年の英語圏(オセアニア、イギリス、カナダ等)では、従来の4技能(聞く・話す・読む・書く)に加え、見て理解する力(=Viewing 以下、ビューイングと表記)を5つ目の技能として、養成するカリキュラム体系を構築している。英語圏でビューイングを言語教育に組み入れた背景には、英語圏におけるメディア・リテラシー運動に英語教育者が積極的に関与してきた歴史がある。ビューイングの教材を分析してみると、ビューイングはメディア・リテラシーの言語教育カリキュラム化であると言える。他方、ビューイングは、先進的な英語教育者による、今後の英語教育の方向性宣言とも言える“Multiliteracies”(Cope, B. & Kalantzis, M.(eds), 2000)における「視覚的意味」理解に対応しており、言語教育の可能性を飛躍的に広げる面をもつ。

筆者らは、2000 年前後から日本語教育、国語教育、英語教育にメディア・リテラシーを導入することの意義を実践的および理論的に主張してきた。言語教育における自らのメディア・リテラシー実践においては、メディア・リテラシーを言語教育の中に明確に位置づける必要を強く感じ、2002 年における奥泉による西オーストラリアにおけるビューイング教育カリキュラム紹介に接し、以後、主として英語圏のビューイングカリキュラムに学びつつ、日本語教育と国語教育においてビューイング教育の実践を部分的に行ってきた。

ビューイング教育の意義を訴える共同研究発表を国内の学会のみならず韓国、オーストラリア、イギリスなどで行い、ビューイング教育を日本語教育に導入の必要性とその試みを紹介してきた。

2009 年度から 2011 年度までの科研費による共同研究「日本語教育におけるビューイング教育の導入 メディア・リテラシーを踏ま

えて」(研究代表者：門倉正美、課題番号：21520532)において、上記(3)から(6)の共同研究発表をする過程で国語教育、英語教育のみならず、社会言語学、メディア論、心理学、教育学、絵本論等さまざまな研究領域の国内・海外の研究者たちと、ビューイング教育の射程と意義について実りある学際的探究を深めることができた。ビューイングの日本語教育への導入については、岡本、門倉の大学のクラスにおいて試行的に教育実践している。

2. 研究の目的

1の成果をもとに、日本語教育、国語教育、英語教育の連携のもとに、日本の言語教育においてビューイングを導入するための土台づくりとして、「言語教育におけるビューイング教育の教材・教授法モジュール」を作成する。その際、年少者日本語教育をはじめとする年少者への言語教育におけるビューイング教育の活用に特に重点をおく。

3. 研究の方法

筆者らがこれまで英語圏の動向を調査し学んで、日本語教育、国語教育に援用してきた蓄積をもとに更に、移民先進国で多言語多文化社会である英語圏の実践現場を訪問し、メディア・リテラシーおよびビューイング教育の実践現場を視察し、研究教育者との意見交換を通して、英語圏とは異なる日本の社会的文化的状況に即した「言語教育におけるビューイング教育の教材・教授法モジュール」開発のための知見を収集し整理する。学校現場で使用されるようになったデジタル教材を中学校夜間学級現場で使用する機会をもつ教員に協力を得て、デジタル教科書を通し、ビューイング導入の必要性とその可能性を実践的に検討し、モジュール作成の基礎的な視座を得る。

4. 研究成果

(1)前科学研究の成果を引き継ぎ、上記目的

にそって、調査研究し、以下のように日本語政策学会において毎年分科会をコーディネートし、成果を発信した。2013年第15回研究大会では、「メディアと言語政策」、2014年度大会では、「メディア・リテラシーと言語教育政策の課題」と題し、元ジャーナリストの下村健一氏、五十嵐浩司をお招きし、ジャーナリストの視点と政策側からの葛藤を通じたメディア・リテラシーのあり方への提言と、現在教鞭をとられている大学や市民講座での実践報告を広く公開した。2015年度大会では、「マルチリテラシーと言語政策」と題して、「言語保障」の分科会との連携を通して、視覚障害者研究のホープである広瀬浩二郎氏による「触る文化」研究、武蔵野美術大学での三代純平氏のCM制作の授業実践を紹介した。これらの発信を通し、日本の教育現場におけるリテラシーの捉え方の現代的变化とそれに対応する言語政策の在り処の視座を多くの研究者や現場の教育者に提供した。

(2)マルチリテラシー研究の第一人者のオーストラリアカトリック大学のLen Unsworth教授を招へいし、2014年度日本語政策学会との共催で、秋季特別研究集会「多言語・多文化社会におけるマルチリテラシー教育の重要性」を実施した。Unsworth教授の「Introducing multiliteracies pedagogy in multicultural elementary school classrooms in Australia: Teaching literacy of English as an additional language or dialect(EALD)」と題する基調講演を通して、マルチリテラシー教育学の研究背景と基礎理論の提供およびそれをふまえたオーストラリアの初等教育現場における実践を紹介した。その成果は、研究成果「その他」で公開した。(門倉 2016)

(3)岡本は、現在若者中心に広い年齢層に広がっているLINEチャットを分析した国内外の発表や書籍を通し、対面コミュニケーション

ンでも暗黙の内に活用されているマルチモードのリテラシーがあること、メディアコミュニケーションにおいてもそれがメディアの場面性に対応し活用されている可能性がある事を提示し、マルチリテラシー育成の必要性を確認することができた。(岡本他、2014、岡本 2016、岡本他 印刷中)

(4)奥泉は、書籍において、国語科教育に焦点を当て、国語科教育の歴史において初めて「メディア・リテラシー」の実践が行われてから現在までの全実践論文を検討・整理して、写真、絵、テレビ、映画等のメディアを用いたビューイングの授業における「これまでの成果」と「今後への課題」を書籍にまとめた。

(奥泉 2015)当該書の編著書は、国語科におけるその実践史において重要な提言を行ってきた全ての研究者が執筆に参加している。さらに2点の論文において国語科の立場から、絵本の活用やその学習に必要なメタ言語の整理も行った。1点目は、絵本における登場人物と読み手、及び登場人物相互の関係に着目して、その対人的な意味を、選択体系機能理論におけるアプレイザルという方法を援用して、分析し読解していく方法について論じた論文である。2点目は、物語の読みにおける登場人物の造形の深化・構築に焦点化し、絵本を題材として、絵と言葉との関係によって造形を構築していく読解方法を整理・提案した論文である。奥泉他(2015)

(5)教育実践では、連携協力者の樋口が、平成26年度2月、中学校夜間学級にて、光村国語デジタル教科書を利用し、単元「モアイは語る - 地球の未来」(40分×6回)の授業を行なった。生徒は日本語能力で二つに分けられた上位クラス9名で、65歳以上の3人(うち日本語母語話者2人)と、若年層(15~20歳)6人(うち2人は日本の小学校に通学経験あり)の非日本語母語話者で構成されている。母語は、中国語5人、日本語2人、タガログ語1人、韓国語

1人である。

単元終了後実施した当該授業についての感想文自由記述を通して以下7点を見出した。ルビつきで全部読めるのが良かった

教科書の何頁何行目が聞き取れないことが多いが、全面表示された教科書で指差してくれるのでわかった。「ころ」の図の説明も聞くだけではわからなかったと思うスクリーンのポリネシアの青い海とモアイは迫力があり、行ってみたい気持ちになった

漢字の筆順ムービーを見て、正しく書く必要性を感じた。ゆっくり読めない。考えられないスクリーンを見ているので、先生の説明をメモできない教科書を読む音声がでると良い。

夜間中学の生徒は年齢やその背景は様々で、全国的に見ても8割が日本語非母語話者である。この非母語話者にとってはデジタル教科書が国語を学ぶための基礎的事項を確認するには有効なツールとなった。しかし、その先にある国語の目的の一つ「論理的思考力を養成する、抽象的な概念の把握すること」に貢献する事項は今回見つけることができなかった。

これらの気づきは、「抽象的概念」の把握には、言語と合わせ、イラストや絵が使われていることは、デジタル教科書とアナログ紙媒体の教科書で共通しているが、デジタル教科書と通常の教科書との違いも考慮に入れたビューイングの観点を取り入れた5技能を統合したマルチモードの教育学の指導が必要であることを示唆している。その意味から、(1)(2)で実施した学会発表や特別集会、(3)(4)の研究成果、(5)の授業実践報告を通し、外国籍児童生徒が増加に伴い、多言語多文化化の一途を辿る日本の初等中等教育現場の日本語教育、英語教育、国語教育に、マルチリテラシーの教育学をふまえた「ビューイング」の導入が急務であることを確実に示すことができた。今後は、

当初掲げた目的である「ビューイング教育の教材・教授法モジュール」の作成がまだ道半ばであり、引き続きその作成の完成と教育現場での導入を目指したい。更に、学校教育現場のみならず、多様なメディアを駆使したでデジタル社会におけるマルチリテラシー育成を、地域の多文化共生社会を目指した市民リテラシーの重要な一部として捉え、そのあり方の提言にもつなげていきたい。

5. 主な発表論文

〔雑誌論文〕(計 2 件)

奥泉香、水澤祐美子 他 1 番目、「絵本における登場人物と読み手が織りなす三者関係による対人的な意味の様相」、『機能言語学研究』、査読有、第8巻、2015年、pp.99-113

奥泉香、他、1 番目、「国語科における絵本を活用した意味構築の学習 - 登場人物の造型を検討する枠組みの整理と発問の開発 - 」、『国語教育史研究』、査読有、第15号、2015年、pp.1-9

〔学会発表〕(計 7 件)

岡本能里子、奥泉香、他、多言語・多文化社会におけるマルチリテラシー教育の重要性、日本言語政策学会秋季特別研究集会、京都大学、2014年11月3日

岡本能里子、他、マルチリテラシーと言語政策、日本言語政策学会、椋山女子学園大学、2015年6月7日

服部圭子、岡本能里子、Multi-modal Communication in Japanese using LINE、17th World Congress of Applied Linguistics、オーストラリア、ブリスベン、2014年8月12日

岡本能里子、他、メディア・リテラシーと言語教育政策の課題-元ジャーナリストによるメディア・リテラシー教育実践から、日本言語政策学会、千葉大学、2014年6月8日

岡本能里子、門倉正美、他、メディアと言語政策-コミュニケーション政策としての言語政策、日本言語政策学会、桜美林大学、2013年6月2日

〔図書〕(計 4 件)

岡本能里子 他、ひつじ書房、雑談の美学、2016年、320、pp.213-236

岡本能里子 他、明石書房、国際理解教育ハンドブック、2015年、264、pp.187-192

岡本能里子 他、ひつじ書房、インタラクティブと学習、印刷中

奥泉香 他、溪水社、メディア・リテラシ

ーの教育—理論と実践の歩み、2015年、292、
pp.5-18

〔その他〕

門倉正美、リテラシーの「複数性」の2つの
意味合いとは？：2014年度日本言語政策学会
秋季特別研究集会「多言語・多文化社会にお
けるマルチリテラシー教育の重要性」報告、
2016年、日本言語政策学会会報24号
<http://jalp.jp/wp/?p=1277>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 能里子 (OKAMOTO Noriko)
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号：20275811

(2) 研究分担者

奥泉 香 (OKUIZUMI Kaori)
日本体育大学・児童スポーツ学部・教
授
研究者番号：70409829

服部 久美子 (HATTORI Kumiko)
和洋女子大学・人文学群国際学類・教
授
研究者番号：70218501

(4) 研究協力者

門倉 正美 (KADOMURA Masami)
横浜国立大学・名誉教授
樋口 万喜子 (HIGUCHI Makiko)
横浜国立大学・留学生センター・非常
勤講師